

連なる周防の山高く…世紀の空に高らかに！



第 32 号
発行・鴻文会

山口大学 文理学部文文学科・
人文学部・大学院人文科学
研究科 同窓会

(連絡事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2

沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール: fycsf998@ybb.ne.jp

「連なる周防の山高く／いま暁の雲を呼ぶ」「未来の覇者の歌声は／世紀の空に高らかに」と歌った山口大学学生歌。その「連なる周防の山」とは、朝夕見上げるあの東方便山を主峰とする山並みにして、いまま変わらず——。されど「世紀」は移れり、なれど「世代の覇者」ぞやまいずこ、である。現在では学生歌も歌われることもなく、歌の存在すら知られていないと聞く。せめて同窓会誌に掲げておくのみか、「あゝ山大 山大 山大！」——。さて、「暁の雲」とある以上、朝は7時半の撮影となった。山口駅裏の象頭山（ぞうずざん）からの見晴らしである。

山口大学文理学部文文学科、人文学部同窓生の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと拝察いたします。

人文学部を取り巻く環境は、日々厳しさを増しています。本年六月初めに文部科学省から発表された「大学改革実行プラン—社会変革のエンジンとなる大学づくり—」では、学部・研究科ごとのミッションの再定義、予算の戦略的配分・重点支援、大学の機能強化と国公私立という設置形態を越えた新たな連携、一法人に複数の大学が所属するアンブレラ方式を見すえた大学の再編成などが、今後の国立大学法人に与えられる課題として提示されました。国家戦略会議などの議論を反映した行政改革、産学官連携強化という色彩が濃厚な本プランは、高等教育の質保障・転換という視点を欠き、まさしく政策誘導型の改革案です。また、公財政支援のメリハリある資源配分という大義名分のもと、「国立大学における政策目的に応じた基盤的経費の重点的配分」による教育改革を即座に実施するとも謳われており、今後、大学改革の競争論理で運営費交付金が配分されることになりそうです。一〇月四日・五日に琉球大学法文学部を当番校として開催された国立大学法人一七大学人文学系学部長会議の席上でも、この問題について人文学系学部の将来を危ぶむ声が多く聞かれました。

例えば、このたびノーベル医学生理学賞を受賞された京都大学山中伸弥教授の人工多能性幹



乗風破浪

人文学部長 根ヶ山 徹

細胞の作製のような世界最先端の研究には、当然のごとくスピード感が必要です。ところが、人文学部が対象とする学問分野には分秒を争うものはありません。また、成果を数値化できるものでもありません。にもかかわらず、法人化以降の国立大学では、もっぱら効率が優先されて短期間のうちに成果をあげることが求められ、そのエビデンスも重視されてきました。研究成果を目に見える形で伝えにくい人文学部にとっては、逆風悪浪のただ中にあるといっても過言ではありません。

昨年三月一日の東日本大震災では、津波で家々が流され、原子力発電所が放射能をまき散らすという壮絶な光景を目の当たりにしました。八月の台風一二号では熊野川流域で洪水が発生し、今年に入ってから、最大瞬間風速六〇メートルを超える超大型の台風が立て続けに発生し、甚大な被害をもたらしました。自然の脅威だけではなく、資源・エネルギーの枯渇、環境問題の深刻化、民族・宗教対立の増大、市場原理の肥大化など、克服すべき課題は山積しています。これに比べて、現代社会が具備している叡智はあまりに貧弱であるがゆえに、我々に自信を喪失させ、不安を抱かせる要因となっています。今こそ、地域、時代、民族といった異文化の壁を乗り越え、人間という存在のさまざまな側面を総合的、徹底的に探求し究明し、現在と未来をよりよく生きるための叡智を見いだし、また創造しなければならぬと痛感しています。科学技術の進展の影に隠れて見逃されていますが、人間にとって最も根源的、革新的な問題に正面から取り組むことのできるの、人文学部の学問しかないことを確信するからです。

末筆ではございますが、みなさまのご多幸とご活躍を祈念いたしますとともに、人文学部への変わりぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(人文第四回卒・S 60・中国語学・中国文学)

同窓会のつながりを大切に



副会長
宮藤 隆夫

今年の暑い夏をより熱くした史上最多三八個のメダルを獲得したロンドン五輪、時差の関係で競技が深夜に行われるにもかかわらず、地元出身の選手が出場する試合のパブリックビューイングに全国各地で地域を挙げて多くの老若男女が参加しました。ロンドンから遠く離れた日本の地からその活躍に会場一丸となつて熱いエールを送り、その声援を励みに日の丸の重圧を背負い全力で闘う選手の姿に、勝ち負けの結果を問わず感動を覚えました。

よく「運も実力のうち」といいます。今までも数々の競技、試合でこの言葉なるほどと思わせる勝負を見せられてきました。このたびのロンドン五輪でも、前評判どおりの実力を発揮し栄光を手にした者、実力に加え運も味方につけてメダルを引き寄せた者、実力はあるながらこのたびは少々運にも見放されたため残念な結果に終わり期待に応えられなかった者など、四年に一度の晴れ舞台で、「勝負事には運が左右する。」というアスリート達の現実を改めて知らされた思いがします。

【来年は総会の年】

オリンピックの開催は四年に一度。これ以外で四年に一度のものといつてすぐ頭に浮かぶのは、閏年、アメリカ大統領選挙。しかし、これ以外で鴻文会の会員として忘れてならないのは、鴻文会総会です。

鴻文会会則第九条には「総会は四年ごとに開催し、・・・」とあり、これにより鴻文会総会は四年に一度と定めています。このことは同窓会員のほとんどの方が御存じないと思われま

昭和五三年（一九七八年）、文理学部改組発展に伴い人文部が発足したことにより、少し

遅れて学部同窓会である鴻文会が設立されたのが昭和五六年（一九八一）年です。その年の設立総会が第一回。その後四年ごとに総会が開催されてきました。前回の総会が平成二年（二〇〇九年）、四年後の平成五年（二〇一三年）、つまり来年が第九回の総会の年に当たります。

前回の総会は、はじめて会場を学外に移し、湯田温泉のホテルで開催しました。それというのも、前回の総会は、第六回総会と同様に平成一八年以降三年ごとに総会が行われることとなった理学部同窓会である鴻理会との合同開催となつたからです。鴻理会は今年が総会の開催年でした。今後鴻理会との合同開催を続けるとなれば、次回の合同開催は、鴻文会第一回総会の年、平成三年となります。

来年第九回総会は、現在開催内容を検討中ですが、開催時期は前回同様八月中旬、会場は大学構内を予定しています。

会員数は自然増で年々増加しているものの、今日の時代の流れとして、特に若い世代を中心に同窓会離れや同窓会への帰属意識の低下が見受けられます。というよりも、そもそも自分が鴻文会の会員であるという認識が欠如しているのが現実ではないでしょうか。

四年に一度の来年度の総会、一人でも多くの会員の方にご出席をしていただき、出席してよかったと言っていただけの総会にするにはどのような総会とするのか。「三人寄れば文殊の知恵」といいますが、会員誰もが参加し易い総会を目指して今無い知恵を絞っております。後日改めて総会のご案内を差し上げますので、研究室や同期の会員同士誘いあつて多数ご出席くださることを切に願います。

なお、今後総会の年を忘れることのないよう、オリンピックの翌年が総会の年と覚えておいてください。

【研究室同窓会等に対する助成制度の活用】

総会が四年ごとですので、総会開催以降次期総会までの期間中に会員相互の親睦と交流の活性化を図れるよう、同窓会の新しい事業として研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会の開催に対し、その開催経費の一部を助成す

る制度が創設されました。

昨年度は試行期間としておりましたが、今年度に入り「研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会に対する助成要綱」による制度創設を役員会で正式決定し、本年五月十九日以降に開催される同窓会等に対して助成を開始しました。

参加者が正会員五人以上とか、助成額は正会員一人当たり千円以上上限二万円とか、事前申請とか色々助成要件がありますが、是非この制度を有効活用し、旧交を温めていただけたら幸いです。助成要綱、助成申請書等詳しくは鴻文会ホームページに掲載しています。

因みに、助成実績は、試行期間中に同期会が一件、本年度に入り研究室同窓会が一件、同期会が一件となっています。本年度五万円を予算措置していますが、申請があれば予算を追加してでも対応することとしています。

なお、来年の総会開催に合わせ総会終了後の懇親会とは別に研究室同窓会や同期会が行われる場合も助成の対象としてと考えています。助成制度の積極的活用を是非お願いします。

【創基二〇〇周年記念募金への協力】

山口大学が文理学部、教育学部、経済学部、工学部及び農学部の五学部で発足したのは、昭和二年（一九四九年）五月三十一日です。その後、昭和三九年（一九六四年）に医学部が設置され、また、昭和四一年（一九六六年）に文理学部を改組して教養部（平成八年廃止）が設置されました。更に、昭和五三年（一九七八年）に文理学部を改組し人文学部及び理理学部が設置されて現在の七学部体制となりました。

したがって、山口大学の設立は、昭和二四年（一九四九年）であり、平成一年（一九九九年）に設立五〇周年を迎えました。しかし、その歴史を遡れば、山口大学の始まりは文化二二年（一八二五年）に設立された私塾「山口講堂」であり、この講堂を前身とするというのが大学の公式見解となっております。したがって、山口大学は、平成二七年（二〇一五年）に「創基二〇〇周年」を迎えることとなります。

「設立」と「創基」を使い分ける意味の詮索はさておき、我々の母校山口大学が全国の国立

大学の中で東京大学、東北大学に次いで三番目に歴史が古く伝統ある大学であるということでは、卒業生として非常に素晴らしいことであり、誇りとすべきことです。

創基二〇〇周年を迎えるに当たり、大学では記念碑等の設置や記念イベントの開催、更にはキャンパス環境整備等多彩な記念事業が計画されています。

こうした様々な記念事業を計画通り実施するため、現在募金活動が行われています。鴻文会会員の皆様方におかれましては記念事業の趣旨にご賛同いただき、記念募金に是非ご協力いただけますようお願いいたします。

なお、詳細につきましては、同封の募金趣意書等の資料をご覧ください。

【年寄りの繰り言】

私は、鴻文会発足以来学外委員を務めてきました。発足以後現在まで継続して委員を務めている者は私のみのようですが、ただ長いだけで内心忸怩たる思いです。委員としての活動は、役員会に出席するぐらいで、以前は学内委員の先生方におんぶに抱っこで学外委員としてはあまりお役に立つてはいなかったと思っております。それでも、役員会には必ず出席することを心掛けました。

三年前の総会で成り行き上副会長に就任しましたので、岡光会長の同窓会に対する熱意と滅私奉公の姿に接し、岡光会長のもと北川副会長ともども非力ながらお手伝いをしてきました。

多忙な学内委員の先生方に頼らず、学外委員が主体性を持って自主的に同窓会を運営していくためには、研究室ごとに選任されている学外委員の同窓会への積極的な関与が必要で

は名前だけの人が多いたのが現状であり、このため一部の委員に負担が集中しているのが実態です。来年の役員改選に当たっては、同窓会活動に少しでも関心があり、手助けできる委員が選任されるよう学外委員の選任等についての見直しが必要ではないかと思っております。

私自身、次期はお役御免、老兵はただ消え去るのみの心境です。
(文理第一五回卒・S42・社会学)

鴻文会、この一年



会長 岡光 一浩

昨年九月頃から一年間の、鴻文会の活動のいくつかについて報告しておきます。まず、なによりも熱を入れて取り組んだことには、会報「鴻文」第三一号の作成と発行があります。会長を承った際、二年後の一〇月三十一日に鴻文会が発足三〇年を迎えることは承知しておりましたが、どのような形でお祝いするかは決まらないうままに時間は過ぎていきました。しかし、さまざまな検討・協議をととして、昨年五月の役員会で会報第三一号を三〇周年記念号とすることが決定され、早速その準備に取り掛かりました。その編集作業のさなかの一〇月末には編集委員でお茶とケーキでささやかな三〇周年のお祝いをし、その後、予定どおり一二月には会報第三一号を記念号として発行することができました。ご覧のように、丸本山口大学長と湯川人文学部長から心温まるご祝辞をいただき、また同窓の皆さまからそれぞれの思い出の詰まった懐かしい玉稿を頂戴し、さらにそれらに多様な記事と豊かな色彩が混ざり合い、会報第三一号は、鴻文会の三〇年を回顧するとともに、今後の発展を約束するのに相応しい記念号となりました。これらはひとえに、北川副会長を中心とする編集委員諸氏の並々ならぬご尽力と会員の皆さまのご協力のたまものです。多くの方々から心からの感謝を申し上げます。

さて、すでに会報第三一号でもお知らせしていますが、改めてここでも皆さまにご報告しておきます。鴻文会では発足三〇年を記念して昨年一月一日より、会員相互の親睦と交流をより活発なものにするために、「研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会」（「同窓会等」）の開催に対する助成活動を始めました。制度設定後まだ一年足らずですが、すでに同期会二件、研究室同窓会一件から助成のお申し出があり、協議のうえ喜んで助成を行いました。その愉しく意義ある活動の様子は、本会報に寄稿されている報告によってもたつぷりと味わうことができます。この助成は「同窓会等」の開催に際しての費用の若干の援助にすぎませんが、その趣旨や内容等については本会報にも掲載されておりますので、すずんでこの制度を利用され、仲間との親睦と交流を図っていただければと思います。

今年度の役員会は例年どおり五月に開催され、昨年度の事業報告・決算や今年度の事業計画・予算などの報告・協議が行われました。その内容等については本会報でもご覧いただけますが、そのことのひとつについて皆さまにお願いがあります。すでにご承知だと思えますが、山口大学は二〇一五年に創基二〇〇年を迎えます。昨今、その「山口大学創基二〇〇周年記念事業」に関する会議が頻繁に開催され、その協議に北川・宮藤両副会長が加わっております。今回、皆さまのもとにこの記念事業事務局からの「ご寄附のお願い」を同封させていただいておりますが、なにとぞ、趣旨にご賛同いただき、よろしくご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

最後に、来年度の予告をしておきます。来年は四年に一度の鴻文会総会の年に当たります。なによりも、総会により多くの会員の方々がご出席下さり、その場が心愉しく有意義な集まりとなること、そのことが同窓会にとって重要で喜ばしいことです。そのような総会にすべく、現在、鋭意、考えをめぐらし準備に取りかかっておりますが、前回同様、講演会・懇親会を含めた総会を八月半ばに予定しております。また、この総会の機会に併せて、研究室同窓会や同期会などを開催されてはいかがでしょうか。多くの会員の方々の方々の総会へのご出席を心よりお待ちしております。

研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会に対する助成要綱

（目的）

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会（以下「同窓会等」という。）に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

（助成の対象）

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

（助成の内容）

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

（助成の申請）

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書（別紙様式1）に参加者名簿（別紙様式2）を添えて提出するものとする。

（助成の内定）

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長（以下「会長」という。）はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

（報告書の提出）

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書（別紙様式3）を提出するものとする。

（助成の決定等）

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

（会報原稿の提出）

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」（以下「会報」という。）に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業序次、卒業年及び専攻を（ ）内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

（その他）

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

◎平成23年度事業報告

1. 正副会長会議(5月6日, 6月10日)
2. 学部との会議(5月13日)
3. 第39回役員会(5月14日)
4. 「鴻文」編集会議(7月1日, 10月28日, 11月25日, 12月16日)
5. 留学生奨学金授与式(8月9日)
6. 第2回・3回山口大学創基200周年記念事業企画・実施部会(8月9日, 2月1日)
7. 第9回・10回山口大学同窓会理事会(8月9日, 3月14日)
8. 第1回・2回山口大学同窓会会長候補者選考委員会(8月9日, 11月30日)
9. 「同窓会等」の開催に対する助成の開始(11月1日)
10. 会報「鴻文」第31号(創立30周年記念号)発行(12月10日)
11. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席(3月21日)
12. その他

◎平成24年度事業計画

1. 正副会長会議(5月11日)
2. 第40回役員会(5月19日)
3. 会報「鴻文」編集会議(未定)
4. 山口大学同窓会理事会(未定)
5. 山口大学創基200周年記念事業企画実施部会および事業支援部会(未定)
6. 留学生奨学金授与式(未定)
7. 会報「鴻文」第32号発行(12月予定)
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席(未定)
9. その他

◎平成23年度決算

収入総額	5,879,719円
支出総額	4,308,457円
残高(次年度繰越金)	1,571,262円

◎平成24年度予算

〈収入の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
繰越金	3,410,832	3,410,832
会費収入	1,800,000	1,740,000
繰入金	0	402,247
賛助金	300,000	326,080
雑収入	9,168	560
合 計	5,520,000	5,879,719

〈支出の部〉

科 目	23年度予算額	決 算 額
会議費	100,000	63,780
役員等行動費	100,000	46,823
事務所運営費	850,000	844,575
事務費・通信費	150,000	172,963
会報費	1,200,000	772,860
ホームページ維持費	50,000	20,784
分担金	150,840	150,840
寄付金	100,000	100,000
奨学金	150,840	101,260
助成金	0	20,420
慶弔費	50,000	14,152
積立金	2,000,000	2,000,000
予備費	618,320	0
合 計	5,520,000	4,308,457

〈特別会計〉

科 目	22年度財産	23年度財産
中国電力債	1,438,657	1,438,657
定額預金	0	2,000,000
定額預金	2,950,000	2,550,000
合 計	4,388,657	5,988,657

平成24年5月15日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博
渡邊 早苗

〈収入の部〉

科 目	24年度予算額	摘 要
繰越金	1,571,262	
会費収入	1,800,000	10,000×180人 H24.4/1～H25.3/31納入者
繰入金	0	特別会計より繰入
賛助金	300,000	
雑収入	8,738	利子等
合 計	3,680,000	

〈支出の部〉

科 目	24年度予算額	摘 要
会議費	100,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	100,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	850,000	家賃、人件費、横断幕取付・撤去費 事務所経費(電話、電気、町内会費)
事務費・通信費	150,000	封筒印刷5,700枚、事務印刷費、通信連絡、郵送、消耗品、雑費
会報費	620,000	印刷6,500部、5,500通送付、発送アルバイト代
ホームページ維持費	50,000	プロバイダ・契約料、メールリストチェック料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会(手数料含む)
寄付金	100,000	山口大学教育財団「日中学術交流基金」
奨学金	151,000	留学生への支給(手数料含む)
助成金	51,000	「同窓会等」開催助成(手数料を含む)
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、その他 香典料、弔電
積立金	1,000,000	特別会計へ繰出
予備費	307,000	
合 計	3,680,000	

〈特別会計〉

科 目	24年度財産	摘 要
中国電力債	1,438,657	東洋証券
定額預金	5,550,000	一般会計より繰入
合 計	6,988,657	

山口大学同窓会/理事会

▼第一〇回理事会(平成二四年三月一四日/ 会長岡光・副会長北川出席) 佐々木孝治会長が留任



佐々木孝治会長

- (一) 会長候補者選考と現会長留任の承認
(二) 創基二〇〇周年記念事業の説明
(三) 創基二〇〇周年記念事業の説明と協議

- ①四月から活動開始。結成する記念募金の会長には宇部興産社長を予定。
②ホームページも始動。記念誌の執筆も各同窓会に依頼。
③事業関連イベントとしてパネルディスカッション「明日の山口大学ビジョン」を開催し

た。

- ④記念事業の開催期間は二〇一五年の五月三〇日、三十一日、六月一日、二日の四日間。式典会場はアリーナ。仮契約済み。
⑤募金目標額は一〇億円。うち同窓会分は一億五千万円。記念事業会で決定した。企業一〇〇〇社の訪問を予定している。
⑥支部同窓会の開催などに際しては、本部からも募金呼びかけのため出席する。
⑦公共団体(県市町村)からの免税措置は取っている。一市を除いて。
⑧これまでの実績からすると、昭和三〇年代までの卒業生は応ずる気風があるが。
⑨各同窓会の会報と合わせて募金依頼を送付するよう手配している。
⑩寄付者の名前をどう発表するか、しないか考慮している。

創基二〇〇周年記念事業企画・実施部会報告

- ▼第三回企画・実施部会(平成二四年二月一日 /副会長北川出席)
①記念誌の編纂...:編纂スケジュール、割付案等説明あり。
②広報活動...:HP開設、フォトコンテスト開催、ピンバッジ・卓上旗配布
③記念建設...:野外ステージ、モニユメントの建設など。
④冠行事の開催...:記念講演会・シンポジウム等の開催
⑤記念式典...:日時・会場の候補設定あり。
⑥募金の趣意書

▼第四回企画・実施部会(平成二四年七月二二日 /副会長北川出席/一時間一五分)

- ①これまでに「知の広場」学術講演会など五件の冠イベントを開催した。
②記念モニユメントのデザインは公募する。費用増額は検討委員会でさらに協議する。
③マスコットキャラクターを公募、策定する。

④広報・PRについて(説明と提案など)

- ・JRバスで行う・県の公用車でもできる・新山口駅でするとパネル二〇〇万円柱五〇万円・空港でも可能・CDも作成した・新聞広告だと年一回で各紙一五〇〇万円。(文責 北川 健)

創基二〇〇周年記念事業支援部会報告

- (一) 日時 平成二四年九月二六日(水) 午後一時一五分~二時二〇分
(二) 場所 大学事務局二号館特別小会議室
(三) 出席者 支援部会員(鴻文会・宮藤副会長) 鳳陽会欠席

【山口大学創基二〇〇周年記念事業について】

創基二〇〇周年記念事業会、支援部会
山口大学創基二〇〇周年記念事業の実施に当たり、丸本学長を会長とし、各副学長、学部長等を会員とする記念事業会が置かれている。その下に、部会として、記念事業を企画・実施するための「企画・実施部会」(部会長・西田副学長)と記念事業を実施するための財務支援に係る事項を検討する「支援部会」(部会長・村田副学長)との二つの部会が置かれ、部会として、役職指定の副学長の他七学部八同窓会(医学部は二同窓会)から各一人の部会員が選出されている。支援部会の役割としては学部同窓会募金の調整である。

また、これとは別に、学長を本部長とする「記念事業運営本部」が学内に置かれている。

②創基二〇〇周年記念事業

- 記念式典の実施、記念誌の編纂、記念モニユメント・記念碑の設置及び記念イベント等の開催
○ キャンパス環境整備事業
○ 野外ステージの建設
○ 山口大学基金の充実

【山口大学創基二〇〇周年記念募金について】
①創基二〇〇周年記念募金
募金目標総額は、一〇億円で、このうち七学部八同窓会への募金依頼額は、一億五千万円である(各同窓会に対する個別の募金依頼額は示されなかった)。

②創基二〇〇周年記念募金推進会
企業募金等を円滑に推進するため「山口大学創基二〇〇周年記念募金推進会」(会長・田村宇部興産(株) 会長)を立ち上げ、九月から本格的に募金活動を開始することとしている。また、推進会の代表幹事には、この十年間に卒業生百人以上が入社した企業に就任をお願いしている。

以上の説明のほか、募金要領、募金スケジュール等についての説明が村田部会長からありました。また、現在まで既に一千万円余の募金が寄せられていることが報告されました。

記念事業会は、平成二二年九月に設置されましたが、翌年の東日本大震災の発生により活動を一年間停止していました。今回は支援部会の初めての会議(企画・実施部会は数回開催済み)でありましたが、会議内容は、既に大学理事会や企画・実施部会で決定された事項の説明、報告に終始し、支援部会として検討・決定した事項はありませんでした。

募金活動は緒に就いたばかりであり、これから本格的に記念募金活動が行われることとなります。募金目標額達成には大変な努力が必要だと思いますが、鴻文会に対しても他学部同窓会の協力に比肩する協力が求められていると考えております。

(文責 宮藤隆夫)



山口大学キャラクター「ヤマミィ」

人文学部教育職員紹介

(平成二四年一月現在)

学部長(併)

教授 根ヶ山 徹

○人文社会学科

哲学・思想コース

教授 高木 智見
 教授 脇 靖弘
 教授 Alan Djumali
 教授 柏木 寧子
 准教授 藤川 哲子
 准教授 周 多
 准教授 栗原 紀
 准教授 村上 龍

歴史学コース

教授 田中 誠二
 教授 橋本 義則
 教授 馬本 彪
 教授 田中 晋作
 教授 滝野 正二郎
 准教授 藤永 康
 准教授 真木 隆
 准教授 村田 裕一
 講師 池田 勇太

社会学コース

教授 湯川 洋司
 教授 坪郷 英彦
 教授 横田 尚俊
 教授 高橋 征仁
 教授 速水 聖子
 講師 岡邊 健

○言語文化学科

日本語学・日本文学コース

教授 林 伸一
 教授 平野 芳信
 准教授 磯部 佳宏
 准教授 森野 弘
 准教授 尾崎 千佳
 准教授 和田 学

中国語学・中国文学コース

教授 阿部 泰記
 教授 富平 美波
 教授 根ヶ山 徹
 准教授 更科 慎一

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三
 教授 太田 聡
 教授 宮原 一成
 教授 池園 宏志
 准教授 赤羽 仁志
 講師 メドロック麻弥

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 本田 義昭
 教授 Hintereder Binde Franz
 教授 武本 雅嗣
 教授 下寄 正利
 准教授 坂本 貴志

言語情報学コース

准教授 Phillips John David
 准教授 乾 秀行

図書館司書養成課程

准教授 松田 泰代

平成23年度

学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了
建設業	1人	
製造業	9	
電気、ガス、水道	1	
情報通信業	5	
運輸業、郵便業	3	
卸売・小売業	27	
金融・保険業	16	
不動産業	2	
学術・開発研究機関	3	
飲食店・宿泊業	1	
生活関連サービス業、娯楽業		
医療業・福祉	6	
教育、学習支援事業	15	
複合サービス事業	4	
サービス業	4	
公務	27	2
上記以外	1	
進学	3	

学生数

(平成二四年一月現在)

人文学部

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	100人	93人	193人
2年	101	97	198
3年	101	99	200
4年	122	112	234

人文科学研究科

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	3人	4人	7人
2年	4	4	8

田中誠二先生ご退職記念行事のお知らせ

(1) 田中誠二先生最終講義

日時 平成二五年三月二日(土曜日) 午後二時から

場所 山梨大学 学生会館 大ホール
 論題 「維新时期山口藩の藩債・藩札の償還」(仮題)

(2) 田中誠二先生退職記念祝賀会
 日時 同日午後一八時三〇分より
 場所 (未定)

問い合わせ先

山梨大学 人文学部 真木隆行研究室 内

田中誠二先生退職記念会事務局

〒753-8540 山梨市吉田一六七七一

maki@yamanaguchi-u.ac.jp

TEL/FAX 0556-5663-5275

人文学部ホームページ

コース紹介 歴史学コース 国史学(日本史学)

研究室ブログに情報掲載

http://www.hmt.yamanaguchi-u.ac.jp/?author=12

ご退任教員挨拶

定年退職のご挨拶



田中 誠二

平成二五年三月いっばいで定年を迎えます。昭和五二年四月に赴任以来、三六年間在職ということとなります。この間、同僚・学生・史料に恵まれ、仕事を続けることができました。皆様のおかげと感謝いたしております。三六年前の三月二九日に京都で結婚式を挙げ、四月朔日に山口大学文学部に着任いたしました。文学部時代を知る最後の人文学部教員ではないかと思ひます。専門領域は日本近世史で、播磨以西の中国筋をフィールドとしてきましたが、赴任以来もつとも集中して研究してきたのは、地元秋藩です。主著は、『近世の検地と年貢』ですが、この二月には二冊目の論文集『萩藩財政史の研究』を刊行する予定です。退職後は、『萩藩政史の研究』（仮題）をまとめる計画です。さらに余力があれば、四冊目になをやるうかと思案中で、「生涯一研究者」を貫こうと思っております。学生諸君とは、古文書合宿をしたり、ソフトボールをやったり、わいわいにぎやかに過ごした日々が忘れられません。みなさん、グッド・ラック。

(歴史学コース 教授)

山口の地で迎えた人生の転機



周藤 多紀

今まで私の人生にはいくつかの転機があった。一つ目はイギリスの大学院に留学した時、二

つ目はイギリス留学に引き続いて留学したアメリカから帰国した時、三つ目は昨年一〇月に山口大学文学部に赴任した時であろう。思いがけない時期に思いがけない場所への赴任であった。ほぼ軌を一にするように、難航していたアメリカでの博士論文を基にした英文単著 (Tate Suto, Beethius on Mind, Grammar and Logic, Brill) の出版がすんだこともあり、平成二三年は私にとって忘れられない年になった。

山口大学への赴任が決まったとき、京都から引越してくる私に対して「田舎暮らしに慣れてもらわない」との声があったが、赴任から一年たち、その田舎暮らしに慣れつつある。文化娯楽活動の選択肢が多かった京都での生活になつかしく思うことはある。けれども、隣の島根県に生まれ、都会育ちではなかった私にとってはすべてがはじめてというわけではなかった。この一年は、以前慣れ親しんでいた「落ち着いた田舎の生活」を思いだすという過程でもあった。

しかしこれを期にして、今までやったことになかった二つのことを思いきって始めた。一つは西洋中世写本の解読と校訂である。私の学問にとって、イギリスで分析哲学を学び始めた時以来の大きな方向転換である。赴任前後から解読の練習を始めて、一月からターゲットにした一三世紀の『ニコマコス倫理学注解』の写本の解読と校訂の作業にとりかかった。写本の解読はアメリカ留学時代に少々練習したことはあったが、ほぼゼロからのスタートだった。練習を始めた頃には一行たりとも自力で読めず、ターゲットにした写本を読める日が来るようには思えなかったが、今では当該写本なら独力で大部分を読めるようになった。もう一つは自動車の運転である。一二月頃から自動車学校に通って普通免許を取得し、連休明けから自家用車を運転し始めた。運転し始めの頃に二度ほどガードレール等に当たってこすったりしたが、幸いにしてその後は無事である。

上述の二つの新しいことを始め、それぞれについてそれなりの進歩が認められるもの、「私の決断ははたして正しかったのか」と自問

自答することもある。写本の解読と校訂は経験の集積を要する作業であり、多くの研究者は若い時分に始め、博士論文の時点で校定版を作成するのが理想的とされる。山口は車がないと不便とはいえ、車なしには人參一本すら買いに行くことができないようなアメリカの田舎とは違う。徒歩や自転車で行く。また、自動車は一步間違えば人を傷つける凶器になるし、保険や税金等の維持費もかかる。

五年後、一〇年後の私はこの地で始めた二つのこととどう向き合っているのだろうか。時折そう思いながら、授業準備の合間に研究室のコンピュータ上で写本の画像を眺めてテキストを書き、大学への行き帰りに自動車を運転している。

挨拶に代えて



栗原 剛

(哲学・思想コース 准教授)

昨年八月一日付で、人文学部人文社会科学科・哲学思想講座に准教授として赴任いたしました。専門は近世の日本思想史です。長らく神奈川県に育ち、この山口に足を踏み入れましたのは、採用面接の時が生まれて初めてでした。着任からようやく一年余りが過ぎ、季節をひと巡り経験したわけですが、山口での生活や人文学部の印象など、ささやかに振り返って言葉にし、ご挨拶に代えさせていただきます。

吉田キャンパスの第一印象は、何と言ってもそのゆつたりした広さと美しさでした。人文学部三階のテラスから望む山並みは柔らかで、空は大きく、視線を近くに移せば、大学の敷地もまた穏やかに広がっています。首都圏での生活にはついぞなかった、地に足のついた伸びやかな解放感は、キャンパスのみならず、山口という風土全体の印象として、今も私の心を捉えて

おります。

こちらでお世話になるまでは、非常勤講師や研究員としていくつかの大学を渡り歩きながら、糊口をしのいできました。確固たる研究拠点を与えていただいた幸せをかみしめる一方で、教育・研究以外にも様々な責任を負うこの立場には、一年以上経った今も、慣れるということがありません。いまだに緊張は解けないままですが、しかしそれが充実感の一つでもあるのは、ひとえに人文学部の先生方、職員の方々の、また学生諸君の、おらかな誠実に支えられているおかげです。それはこの場を育み、巣立って行かれた本会会員の皆さまから連なる、伝統でもあらうと思ひます。

前任として長くお勤めになった豊澤一先生は、これまで親しくお話しする機会にこそ恵まられず来ましたが、私にとっては卒業論文執筆当時から、ご論考を通して啓発を蒙ってきた恩人です。とくに江戸時代前期の儒学者、伊藤仁斎をめぐるご研究からは、内容はもちろんのこと、人間のありようを厳しくも温かく見つめる、人文学者の本領ともいべき先生ご自身の姿勢に学びました。今思えばそれもまた、山口大学人文学部という環境あつてのものだったに違いありません。

大学をめぐる内外の情勢は、大きく変化し続けています。ほとんど切迫とも感じられる社会からの求めに応じて行くのは、大学にとって必要なことであり、前進でもありません。しかしその一方で、私などの若輩が確かなには知らない、かつての鷹揚な学びの場を懐かしむ言葉が、先生方から発せられることもしばしばです。この一年間の印象を踏まえて言えば、時代の要請に対応しながらもそれに翻弄されることなく、守るべきものを守っていく役割は、まさにこの山口大学人文学部であつてこそ、果たせるものではないでしょうか。その一端に加えていただいた者として、微力ながらこれからも励んでいくつもりです。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(哲学・思想コース 准教授)

山口大学人文学部に採用いただいた



田中 晋作

本年四月、中村友博先生の後任として、山口大学人文学部人文社会科学科歴史講座に採用いただきました田中晋作です。今回「鴻文」の紙面をお借りして、ご挨拶とお願いを申し上げます。

唐突ですが、今朝大学へ向かう道すがら、刈り取りの終わった田んぼの畦に群生する彼岸花が目に入りました。ところが、この花の名前がどうしても浮かばず、しばらくの間もかしさともにとまどいを覚えました。数十年前には、その季節にはごく日常的に目にしていたはずの風景が、急に眼前によみがえったことで少し混乱したのかもしれない。

私の前任地は、大阪府の北部にある池田市という小さなまちで、そのまちの小さな資料館で三〇年間お世話になりました。大阪近郊にありながら、まちの中央部に緑豊かな五月山が広がり、西に猪名川という清流が大阪湾に向け南流しています。豊かな自然が残るまちでありながら、すでに彼岸花を見ることができなくなっていたことに気づかされました。このたび、このような恵まれた環境のもとで、教育、研究に携わることができる機会が与えられましたことは、望外の喜びとするところです。なによりもまず、関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

さて、少し硬い話になりますが、私はこれまで古墳時代の日本列島と朝鮮半島の外交や軍事という地域間交渉を軸にして、古代国家形成過程について研究を続けてきました。といっても、具体的な内容を申し上げますと、それが「オタク」の世界に身を置いてきました。これは、古墳時代の武器、軍事研究の泰斗、故末永

雅雄先生が開かれた関西大学考古学研究室で学んだことによるのかもしれませんが。今後もこの研究を深めていくとともに、あわせて地域とかかわりを持ち、地域から学び教えられた成果を還元できるよう努めたいと思っています。これまでの研究をもとに、山口県域や瀬戸内海沿岸地域と近畿地方の動静を比較する研究にも着手してみたいと考えています。

ところで、近年考古学研究の深化によって、文献史料に限られた時代や地域はもとより、文献史料が豊富な時代や地域でも、考古学によってのみその実態を知りうる分野がきわめて広範囲にわたることが明らかになってきました。考古学という学問は、人間の営みを復元する上できわめて有用であることを、あらゆる機会とおして学生に教示していきたいと考えています。

一方、考古資料は「沈黙の資料」といわれるように、文献史料などに比べてその具体性において劣ります。これを補完し、体系的な論を構築していくためには幅広い知識の獲得が必要になります。「知識は力なり」との認識のもと、学生には豊かで良質な知識の獲得を強く促していくつもりです。また、外国語に接する機会が少ないように思います。自分の勉強も兼ねて、授業以外に英書を読む場を設けました。なんとか数名の学生が参加してくれるようになりましたが、つづけてくれることを願っています。

私事になりますが、今年五七歳になりました。山口大学で仕事をさせていただけなのは、あと八年半です。鈴木博司先生、近藤喬一先生、中村友博先生によって、またその薫陶を受けた多くの専攻生の方々によって築き育まれてきました山口大学の考古学を、同僚の村田裕一先生とともに継承していくことができるように、微力ですが、学生とともにその責務を果たしていく所存です。いささか大風呂敷を広げすぎました。どれだけのことができるか不安な気持ちでいっぱいですが、ぜひとも皆様方の協力、ご指導をお願い申し上げます。

(歴史学コース 教授)

ごあいさつ



岡邊 健

二〇一一年八月一日付で、人文学部に着任した岡邊健と申します。人文社会科学科社会学コースの教育を担当しております。この場を借りまして、鴻文会のみなさまにごあいさつをさせていただきます。

私の専門分野は犯罪社会学です。昨年、これまでの研究を「少年非行の発生態様と関連要因に関する実証的研究——公的データと質問紙調査に基づく検討」という博士論文にまとめたところです。このタイトルからおわかりいただけるように、少年非行に関する諸問題を主たる対象として、計量的・統計的な方法を用いた研究を行って参りました。

私は二〇一一年の春まで、科学警察研究所(科警研)という研究機関に所属していました。科警研は警察庁の附属機関で、警察の政策遂行に資する研究を使命とする国立研究所です。研究を行なう機関という点では共通しているものの、科警研の置かれている環境は、大学のそれとは大きく異なっています。その意味でのこのたびの着任は、形式的には単なる所属機関の「移籍」にすぎなかったのですが、私にとって、まったく違う業界に飛び込む「転職」に近い経験だったというのが、率直なところです。

着任からあつという間に一年が経過し、おかげさまでだいぶ慣れて参りました。社会学コースの先生方をはじめとして、人文学部の諸先生方、また職員のみなさまには、さまざまなお気遣いをいただき、大変感謝しております。

人文学部で担当している講義科目としては、「社会心理学概論」、「現代社会意識論」等があります。このうち「現代社会意識論」では、これまでの研究をふまえて、社会学や社会心理学のパスpekタイプから、犯罪や逸脱とみな

される社会の諸事象について検討しています。ゼミの学生たちの多くも、これらの領域に関心を持っているようです。いわゆる「少人数教育」が山大人文学部の大きな特長の一つであると思われまので、その長所を最大限に活かすべく、少年院の見学に連れて行ったり、刑事裁判の傍聴をさせたりするなどして、彼女らの知的好奇心を引き出すための試行錯誤を重ねているところです。

さて、私は大学入学のために上京して以来、長らく関東地方にいたのですが、高校までの子ども時代の大半は、西日本で生活してきました。父方の実家は岡山県西部の浅口市にあります。ただ、岡山県出身者というアイデンティティはあまり持っていません。実は、実家で過ごしたのは高校時代の三年間だけで、しかも県境を越えて広島県福山市の高校に通っていたのです。さらにさかのばれば、小学校五年生の半ばから四年強は下関市で、その前の数年間は長崎市で暮らしていました。

「私の故郷は一体どこだろう」という、ややネガティブな感覚。転動族の家庭に育った方であれば、共有していただけるでしょうか。私の場合、「故郷はないと割り切ろう」と考えたこともありました。しかし、「岡山弁でも広島弁でもなく」山口弁は、私にとって間違いなく「なじみの方言」でした。中学卒業とともに離れて以来二〇数年ぶりに、山口の地に降り立つて、そのことに気づかされたのです。多感な一〇代前半をすごした山口こそが、私にとって故郷同然の地だったということでしょう。その意味でも、ここ山口大学で働くことを大変うれしく思っています。

もとより微力ではありますが、教育および研究に精進する所存でございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(社会学コース 講師)



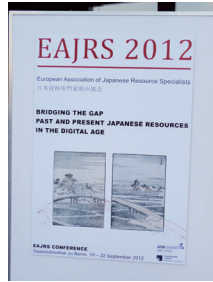
EAJRS (日本資料専門家欧州協会)
二〇一二年 ベルリン大会に参加して

松田 泰代

今年九月、EAJRSで三年ぶりに研究発表するため、ベルリン国立図書館で開催された年次大会(二〇一二年九月一九日〜二二日)に参加した。

EAJRSは、一九八九年に創設、毎年九月頃に年次大会が開催されている。今年は二三回目にあたり、欧州六六名、日本一七名、北米五名、総勢一七カ国九八名の参加があった。

「日本研究資料」というキーワードのもと、図書館の司書および図書館開発室の研究員、博物館の学芸員および研究員、研究者、情報専門家などが集う。



今年の開会式は、ベルリン国立図書館長、日本大使、そしてEAJRS会長の挨拶で始まった。今年のテーマは、資料のデジタル化や電子リソースであり、第一セッションは、「古典籍の大規模なデジタル画像オンライン化のあと、何が次に必要とされるのか」という命題のもと進められた。第二セッションは画像資料に関する発表、第三セッションは一般的な発表が行われた。初日夜の歓迎レセプションは、ヒロシマ・シュトラッセ(広島通り)に面している日本大使館に招待され、大使の心遣いにより音楽と絵画の鑑賞と食事を堪能させていただいた。

二日目は、朝八時半からスタートし、開館前のベルリン国立図書館の見学会、九時からは「長崎学」というテーマで日中交流史やシーボルトの関係文書やコレクションに関する発表がなされた。夕方、ダーレムにあるアジア美術博物館で、閉館後、収蔵品の内覧会を用意して

ただき、筆者は幸いにも六年前、二〇〇六年にベネチアで開催された年次大会で研究発表した史料「熙代勝覧」に再び再会でき感動した。

三日目は、ベルリン国立図書館の貴重書の内覧会が用意されており、貴重な古典籍の数々を拝見させていただいた。この日の最終セッションでは、東欧の研究というカテゴリで、ワルシャワ大学、ブカレスト大学、リトアニアのヴィリニウス大学の日本研究資料のコレクションや図書館の現状について報告を聞いた。

四日目は、博物館のコレクションというセッションと近世資料というセッションがセットされており、前者はプラハ国立美術館とギメ美術館の方の発表があり、後者セッションの最終発表で、ようやく筆者の番となった。「日本近世江戸書物問屋販売許可記録簿「割印帳」の諸本の研究」というテーマで発表を行い、



「古典籍の大規模なデジタル画像オンライン化のあと、何が次に必要とされるのか」という命題に対し、書誌情報とデジタル画像にシームレスで「割印帳」などのデータも表示されるようなシステム構築があってもよいのではないかとという提言をおこなった。

初日から最終日までの四日間、とても緊張した日々であったが、様々な国の人々との出会いがあり、再会があり、研究における交流が広がりそうな楽しさと大学院時代の同じ研究室に在籍した三人が偶然出合い楽しい食事に昔話で花咲いた愉快さのあったベルリン滞在であった。

(図書館司書養成課程 准教授)

平成二四年度
山口大学人文学部
生涯学習事業

山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の方々の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度、次のような事業を行ってまいりました。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)
人文学部の特色を生かした公開講座として平成一三年度に始まり「やまぐちサタデー・カレッジ」も、お陰様で今年一二年目を迎えました。今年度は前期一講座、後期一講座の計二講座を開講し、総計四〇名ほどの方々に聴講いただきました。山口市周辺だけでなく、県内の遠方からの受講者もいらっしゃいます。

会場 山口大学人文学部教室
前期(六月)
下野正利准教授「ことばは変わる」
後期(一〇月)
馬 彪教授「古代(秦漢) 中国人の一日」
来年度も前期・後期に開講する予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。
(山口大学エクステンションセンター、
電話083-933-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(二) 山口大学公開講座(防府市)
今年度から防府市の生涯学習事業に参加することになりました。九月八日(土)に防府市文化福祉会館にて次の講座を実施しました。

林 伸一教授
「コミュニケーション能力養成講座」

少人数の打ち解けた雰囲気の中で二人一組、

四人一組で楽しいエクササイズをいくつも行ない、あつと言う間に時間が過ぎました。

(三) 出前講義
山口大学では、大学教員が各地の学校に出向いて専門的な内容をわかりやすく講義する、いわゆる「出前講義」を実施しております。今年度、人文学部教員が出講した出前講義は、山口県内の高校を中心に、計四件ありました。来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載した資料がありますので、お気軽にお申し出ください。

(山口大学エクステンションセンター、
電話083-933-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(四) 開放授業
大学の授業そのものを一般の方に開放する「開放授業」はエクステンションセンターの事業として平成一八年度から始まりました。人文学部では今年度計七件の授業を開放しました。科目名や科目数などは未定ですが、来年度もいくつかの授業を開放する予定です。詳細はエクステンションセンターのホームページをご覧ください。

(山口大学エクステンションセンター、
電話083-933-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)



防府市での公開講座にて

先輩訪問1

第一回生 重中士明氏(国史学・S28卒)

先達のハイパー性
その基質を訪ねる

「第一回生というのは、気性、気概が違いますヨ。どこの大学でもそうでしょうが、鼻息が違うんです。世の中に向かってのですネ」或るスジから、そう聞かされたことがある。

その第一回生である大先輩の重中士明氏。初対は筆者が卒業後一〇年、時にNHK4国の支局にご在勤中。ダンディにしてスピーディ。

「定年前には山口支局長で帰りますヨ」こともなげにそう公言されるのを聞いて、「さすがは第一回生。なんと世の中を大股で風を切って渡る、気鋭のお人だなア」と、筆者などはたちまち憧憬の念を抱いたものであった。

* 川にシジミとサケが戻ってきた
ところが、本年正月、その重中氏から本会への寄付の申出があった。正子夫人のご逝去による、そのご遺志の寄付である。正子夫人は本学部の第三回生(旧姓貞升/社会学)。そのお礼と甲斐として、筆者北川が豊北町(現下関市)の粟野浦のご自宅へと参上することとなった。だが、その一ヵ月直前になって泡を食った。双



ブラハ城から市街とドナウ河を望む

方の日程調整からして「合致するのは二日しかない」というキワとさ。

「年に五、六回は東京に出てます。この秋には中部ヨーロッパにでかけます」

「公職としては下関市の環境審議会委員」

「当地の磯部浅一記念館の名誉館長。これが私にとっては第一番」

「住み良い豊北を守る会の会長」

「粟野川と共に生きよう会の会長」

など、ハイパーなスケジュール。その一端は「山で木を樵って、それを炭焼窯で焼いて木炭にする。その炭を粟野川の瀬に沈める。それも小学校の子供たちに参加してもらって。これで清流を保ち、清流にしか生えない緑の藻(青ノリ)を守る。そうしたら、なんと川にシジミやサケが戻ってきたんです。場所はいえませんが、極秘です。ハハ……」

「だから、地域が動きだすと市の担当課や市議員のほうから一緒にやりたい、参加させてほしいといってきますですネ」という、地域のフロンティア第一線。

* 記者人生ハイライトは浅間山荘事件

「大学での卒業論文は『栗市楽座』です。あの織田信長の……。今でいう市場自由化、規制緩和、構造改革ですヨ」

「卒論審査で副審の松岡先生から、『キミ、この論文は『中央公論』に出したらよいゾ』といわれました」

なるほど、当時から氏の先進、進取の志向ぶりが頷ける。

「放送界に入ったのは、当時はテレビの創世期。それが海のモノ、山のモノとなるかは誰にも分からない。ボクは『だったらヤレ!』《だからヤル!》《人より先に!》ですヨ」

「何十年前になりますか、世にいう『赤軍派浅間山荘事件』がありましたネ。あの折、ボクはNHKの遊軍チームを率いて乗込み、一隊の隊長として指揮を執りました」

「現地の側面の別荘に陣取り、二四時間の監視体制を組んで、双眼鏡を握り締め、ひっきりなしに放送原稿を書き、送り続けました」

「銃声が響き、私の記者人生のハイライト



重中氏と夫人記念碑

は、あの時だったと自認しています」

* 二・二六事件処刑将校の記念館を

ところで、重中先輩を訪ねるの、筆者は事前

に図書館で『検察秘録二・二六事件』四冊に目を通してから臨んだ。

というのは、重中氏は東京在勤時代に二・二六事件の記念式典に列席、その慰霊処刑者の中に郷里粟野の隣村、伊上村出身将校磯部浅一がいることを知って感奮。以来、その記念館設立を発起。資金を公募。一九九九年、地元伊上村(長門市)に記念碑と記念館を実現されているからである。

その記念館と「磯部の杜」の記念碑を訪ねた。「私の後半生は、この記念館を軸にして展開しました。私の死後、この世に残るものはこれだけ。メモメントですヨ」

「特定の宗派に限ることなく皆の総意という形でやったのが、やはり正解でしたネ」とは、設立館長ならではの言である。

* 玄関から家中に本棚が備わる

さて、氏が「別荘」と称する、本宅そばの少しロッジ風仕立てのお住まいにうかがった。広い板張りの居間に暖炉風のストーブ。

玄関に入って驚いたのは、上がり口から本棚がある。寢室に至るまでも本棚と書櫃用の机がある。比較的新しい書本がドッサリ。

「なに、読書の果ては居眠りですヨ」

庭に正子夫人の記念碑が設けてある。遺影を陶板に焼き付けてのもの。一見して彼女が聡明な女性だと分かる。

「数学の道に進みたかったようですが、父親の反対で文学科へ。だから社会学では統計数

理学をものにして、研究室でも新境地を開いたらしいですヨ」

「子供二人にも高校数学を教えました」

「それでいて、家政学部の卒業生に間違われるくらい、家の事ができましたネ。和裁から着付けなども……」

晩年は壮大なロシア文学に傾倒、音楽は好んでバッハを聴いておられたとか。

* 周囲世人の響き合いの中で
今回、重中先輩に接して筆者が目を見張ったのは、何よりも《この世人の間尺を越えた視野と即断力の持主が、世人の一体感と一体性の持主でもある……》ということ、にである。

下関市の環境審議会でもそのような雰囲気と役割であるらしい。

「委員の半分は学者先生ですから、ボクなんかは時々爆弾発言をやるんです。でなきゃ世の中のコトにはなりませんからネ。ハハ……」

粟野の地元でうかがえたのは、周囲の人々との親近性であった。それは朝から始まる。

「起きたら外に出てないと、近所の者が戸を叩きにくるんですヨ。起きてるか、生きてるか、つてですネ」

集落の中を案内されると、さらに分かる。「あの向かい側の島の石垣のところ、あそこはウチの地所です。往き来するには誰かの小舟がなきゃなりません。ハハ……」

「ここがウチの墓地です。もともとそうなんです、いまは近所の家々の墓も入ってきて一緒になったんです。ハハ……」

「いまの女主人、あれは私のメイです。まあ町内中が親戚みたいなものでして、ハハ……」

* * * * *
かくしてこの日、先輩重中士明氏の、今にしてもの、シルバエイジにしても、そのハイパーなる先達ふりとオーラのほどに当てられ通しという恩浴に、筆者は預かったのである。

《これぞ大先輩、第一回生!》

あらためて噛みしめたことであった。

訪問日:平成二四年九月二八日

訪問者:北川 健
(文理第八回卒・S35・国史学)

同窓賛歌

若い頭脳の海外流出

山野 健

あるテニス仲間の息子さんは優秀で、ノースカロライナ州立大に留学中に科学雑誌「SCIENCE」に「ダーウィンの自殖説を証明した」との論文が掲載されたのです。日本では、「SCIENCE」に論文が掲載されたということで新聞記事(二〇〇四年一月一七日毎日新聞)になるほど評価の高い科学雑誌です。三二歳の時にスイスのチューリッヒ大の助教授に採用され、三七歳の時に教授に昇格しました。昭和四十九年生まれ、現在三八歳。専攻は進化論のようです。

さらに昨年、今度はイギリスの科学雑誌「NATURE」に論文が掲載されたのです。SCIENCEとNATUREの両方に論文が掲載されたのは、日本人で初めてのようです。また、中曽根氏やレーガン氏などがベネチアサミット(一九八七年)で提唱し、生体が持つ複雑なメカニズムの解明を中心とする基礎研究を国際的に共同して推進し、成果を広く人類全体の利益に供することを目的とする国際プロジェクト(Human Frontier Science Programme)というのがあるそうです。二〇一一年に世界中の研究者の中から選ばれて受賞した一人です。

いずれノーベル賞も受賞するのではないかと我々は密かに期待しているところです。因みに、論文のタイトルは「最近の交雑種における複製遺伝子機能のネットワーク混合解析」というものだそうです。さて、何のことだか分かりますか？

頭脳の海外流出という問題は、私の記憶では以前江崎玲於奈氏が話題になり、以降増えるばかりで解決しそふにもありません。基礎科学研究に対する評価の低さや研究費・待遇・研究設備など研究環境の壁が、大きく立ち塞がっている

るようです。

また、大学の教授制度の硬直さも一因だと思います。その優秀な息子さんも、日本の大学から招聘の話もいくつかあるようですが、研究環境の差は如何ともしがたいそうです。

一方、海外では肩書きに関係なく論文の質が高ければ認められるので、特に若手研究者のモラルは高まることになるでしょう。

日本も、三〇年先・五〇年先を見据えて戦略的に捉え直し、基礎科学研究に対する評価をもっともつと高め、文部科学省も研究費の大幅増加を考へるべきだと思います。企業もそうした趣旨を理解して助成金を増やしてほしいと思います。大学の教授制度も見直す必要があるのではないのでしょうか。

そうしない限り、頭脳の海外流出は今後も無くなるらないと思います。これは、日本にとって大きな損失です。むしろ、世界中から日本に研究者が集まって来るくらいにならないければ、日本の発展は望めないのではないかと思います。

(文理第一五回卒・S42・社会学)

《住所変更連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail : fycsf998@ybb.ne.jp

卒業後を振り返り

二宮 和佳子

大学を卒業してから何度か同窓会に出席させていただく機会がありました。鴻文会総会では卒業後各界で活躍されている先輩方の貴重な講演を拝聴できました。今年六月に開催された社会学同窓会では、世代を超えた方々との楽しい交流ができ、ユーモアを交えながら近況報告をされる諸先輩方からパワーをいただきました。

同窓会に出席して感じるのは、同級生など学生時代を知っている方にお会いすると必ず「変わらないね」という声飛び交うことです。見た目も、キャラクターも学生時代のまま。おそらく第三者が見ると、「そんなわけがない」と思うのですが、本当に変わらない。一目で誰か分かるし、まとめ役となる人も、聞き役となる人も、学生時代と変わらない。ほんのひと時ですが、ニュートラルな自分に戻れる数少ない場所が学生時代を過ごした友人たちです。

残念ながら、ぎりぎりにならないとやり始めない私の性質も変わっていません。卒論もそうでした。締め切りの一月は、連日明け方まで卒論に取り組んでいたことを思い出します。

横田先生にご指導いただきながらコミュニケーションの変化を背景とした戦後若者文化の変遷を書きました。その時々若者を象徴する様々なワードが生まれたことに興味を持ち、それは卒業後も変わりませんでした。

「パラサイトシングル」やら「負け犬」やら「草食系・肉食系」やら、新しいワードを目にする度に好奇心が沸いてきました。ひとつのワードを通して自分が社会の中でどのような位置付けで見られているのかを考へることは、「若者」ではなくなってしまうた今なお、興味のあるところ。と同時に社会が抱える問題と変化の一片をこのような方法で知ることが

できるのは楽しみのも一つでもあります。決して真面目な学生ではなかった私ですが、生涯を通

じて関心を持てる分野ができたことは大学時代に社会学に出会えたからだと思います。

思い返せば卒論をはじめレポートの提出は全て手書きでした。電話といえば固定電話、「携帯電話」はもちろん「ポケベル」すらない時代。就職活動といえば、「資料請求ハガキは何枚出したか」という時代。そんなアナログ・文系で過ごした私が現在は通信関係の仕事に就いています。未だに慣れないカタカナやアルファベットに翻弄される毎日です。日々進化する技術と変化する環境、増えるばかりの情報量。そのスピードに驚いている余裕などありません。いつても最初から今の仕事に就いたわけでは

ありません。卒業時、就職先は決まっていま

り、紆余曲折を経て現在に至ります。これまで

幾つかの転職がありました。それは「縁」なのだと感じています。家族から教えてもらった求人広告や、たまたま紹介された派遣先。そしてそれぞれの職場で出会った多くの人や経験。

山口大学に学び、多くの方々と出会えたのも何かの「縁」。

「自分の軸はぶれないように。でも自分を取り巻く環境の変化は受け容れよう。」卒業から十八年経った今、私が思っていることです。

平成二五年八月に総会併せて、研究室同窓会・同期会を

(人文第一三回卒・H6・社会学)

大学は世界への扉

赤嶺 まどか



山口大学を卒業して、早七年が経ちました。私は、言語文化学科の英米語文化論コースへ進み、英米文学を専攻して来ました。英語を通じて人の生き方を読み解いていくことがとても楽しくて、学びの喜びを感じていました。当時も就職氷河期だったので、多少実用的でない学問を学ぶことに一抹の不安もありましたが、自分が楽しいと思えることが一番である私にとっては、今が楽しければそれでいいと悠長に過ごしていました。しかし、人文学部の授業を受けながら、(出だしからこんなことを書いては怒られそうですが)学んでいることが、社会に出て何の役に立つのだろうかとか、よく友達と話していたものです。ところが、社会に出てから、山大で学んだ人文学が意外と役に立っていると感じています。なぜなら、社会はまさに自分という人間の生き方を問うことの連続で、自分の中にある答えを探りながら、常に自分自身で選択していかなければならないのだからです。

社会に出ると、本当に選択の連続だと実感するのは、卒業後二度も転職を経験したからかもしれません。とにかく興味を感じたら仕事にしたいと思えば、悩みながらも行動を起こしていました。卒業後すぐに就職したのは旅行会社でした。大学生になってから旅行に目覚め、国内も海外もいろんなところへ行きました。高校生の頃までは、社会のせいにしてはいけません、学校という閉鎖的な檻に入れられて、部活や目の前にある勉強にただひたすら取り組むしかない生活だったのに比べて、大学では(旅行に限ったことではありませんが)広い世界を次から次に見ていった気がします。旅行の好きな

ところは、普段見ない景色や人との出会いを通して視野が広がる場所です。そんな旅の喜びを一人でも多くの人に感じてもらいたいと思ったのが志望動機でした。しかし、旅行会社は予想以上に神経がいくらあっても足りない仕事で、大ざっぱな私には向いていない……たったの二年でそう思うようになり、専攻を少しでも活かせるような仕事を探し、北九州ESD協議会事務局の仕事に就きました。この組織は国連大学とつながりがあったこともあって、国内・海外、世代を問わずとにかくいろんな人々と出会い、関わることとなり、学びの毎日でした。市民団体、NGO・NPO、教育機関、行政など、あらゆるセクターの方々との出会いは、何よりも刺激的でした。それから四年後、今度は大学事務の仕事に興味を持つようになり、今年春より地元にある北九州市立大学の事務職へ転職し、教務の仕事をしています。

このように私がかこまで好きなことをして生きてこられたのも、家族・友人をはじめとする周囲の皆さんのおかげだと感謝の日々です。大学での一番の宝である「人との出会い」も今の私を支えてくれています。山大でできたご縁は今も途切れない大切なつながりです。総合大学ならではの魅力で、学部・学科を問わずいろんな専攻の友人を持つことができ、そして先生方に恵まれたと強く思います。周囲に恵まれたからこそ、楽しい大学生活を送れたことは言うまでもありません。

昨今では、震災、原発、いじめ問題、と暗いニュースが跡を絶たず、人同士のつながり、絆が取沙汰されていますが、一方で孤独な人も多くいます。私は最近知人から「居場所は自分で作るもの」という言葉を聞きました。確かに、居場所は誰かが作ってくれるものではなく、自分が人を引き寄せて形成されていくものだと思います。そして、その場所を居心地がいいと感じるかどうかもまた自分です。現役の山大学生にとって山大が楽しいと思える居場所であること、そして、鴻文会が卒業生の心地よい居場所となりますよう、祈っています。(人文第二回卒・H18・英語学・英米文学コース)

研究室同窓会・同期会だより

社会学同窓会総会

宮藤 隆夫

平成二四年度(第三五回)社会学同窓会総会が、恒例の開催日となっている六月の第一土曜日である六月二日に、例年の会場である山口市熊野町の「防長苑」で開催された。総会終了後出席者全員が参加し交流会を行った。

当日は、久し振りに出席された木下謙治先生、小川全夫先生の両先生に加え、一昨年退職された小谷典子先生、更には、研究室から横田尚俊先生、高橋征仁先生、速水聖子先生、岡邊健先生の総勢七名の先生方にご出席をいただいた。

同窓会員の出席は、男性が、昭和二九年卒と四二年卒が各二名、三六年卒、四四年卒、四五年卒、五六年卒、五七年卒及び平成一四年卒が各一名の計十名。女性が、昭和六一年卒二名、平成六年卒四名、平成七年卒と平成一三年卒が各一名の計八名。合計一八名であった。

総会は、弘中副会長(文理第一七回・昭和四四年卒)の司会進行で始まり、会長あいさつに続き先生方を代表して木下謙治先生からご挨拶をいただき、昨年八月一日に科学警察研究所から着任された岡邊 健先生が自己紹介をされた後議事に入った。

会長あいさつの中で、会長から本年三月の卒業生三五名のうち同窓会への入会者は二九名であったこと。毎年発行している会報を本年は九百通発送し、その九割が県外であったこと。研究室同窓会等の開催に対し学部同窓会の鴻文会が助成制度を創設したことなどが報告された。

議事では、平成二三年度収支報告が行われた後、村田監事(文理第一五回・昭和四二年卒)が監査報告を行い、全会一致で異議なく承認された。

総会終了後の交流会は、小川全夫先生のご挨拶と乾杯のご発声により開宴し、しばらく歓談

の後、横田先生から本年三月卒業した学生の就職状況や最近の研究室の状況などについて報告を伺った。その後、出席者一人ひとり思い思いにそれぞれの近況などを報告し、午後七時にお開きとなった。

本年度の総会・交流会は、最近ない多くの先生方にご出席をいただき、平成六年卒業の同期四名の女性会員とともに交流会を大いに盛り上げてもらったことにに対し、毎年出席者が少ないことに頭を悩ませている世話人として、大変感謝している。来年は、学部同窓会である鴻文会の四年に一度の総会の年であるが、来年度の社会学同窓会総会が多くの先生方や会員の参加により盛会となるよう今から期待している。

また、鴻文会が、同窓会員相互の親睦と交流をより深めるため本年度から本格実施された研究室同窓会等の開催に対する助成制度を活用し、鴻文会から鴻文会正会員の出席者一人当たり千円の助成を受けることにより、交流会の会費を例年より低く抑えることができたことは、特記すべきことである。

最後に、昭和五三年の同窓会発足当初から平成四年まで一四年間にわたり会長を務められた竹田守恵初代会長(文理第一回・昭和二八年卒)が本年四月に亡くなられた。謹んで哀悼の意を表し、安らかなご冥福を心からお祈りする。

(文理第一五回卒・S42・社会学)



社会学同窓会総会にて

文学科第一七回卒業生
同窓会開催報告

酒井 良夫

一九六九年三月卒業以来、数年おきに開催してきた会だったが、六〇歳を過ぎると、前回決めたはずの幹事が誰だったのかがみんなの記憶からすっかりなくなり、いつの間にか一〇年経ってしまった。

今年三月で全員が高齢者の仲間に入るという節目の年でもあり、みんなが集まることのできる最後の機会になるかも知れないので国文科が勝手に幹事となつて是非やろうではないか有志で決めた。早速鴻文会事務所に行くと、その場で同期の名簿提供をいただけたので、呼びかけたところ、関東地区三名、近畿地区七名を含め二四名の参加を得て、雪の舞う二月十八日(土)防長苑で開催することができた。

まず、前者の轍を踏まないように、次回の幹事を社会学とし、開催時期を三年後と決めた。九名も参加した英文科の絆の強さと、女性一六名という華やかさとしまじりに圧倒されながら始まった会では、学生時代の思い出、近況報告、自らの苦難の告白、親の介護、子や孫のこと等々が次々と出され、話に酔い、酒に酔うほどに、四三年振りに再会できた人もおり、最初はややふやだった顔と名前が次第に鮮明となり、旧姓が飛び交う頃には学生時代の顔がそこそこあった。三時間ばかりの会はあっという間に終わり、名残を惜しむほとんどが喫茶店に集つての二次会、更に男性数名は夜の巷に消えた。

参加者からは「本当に楽しいひとときでした。私たちが年を重ねましたが、山口の街もずいぶん変わったように思います。新山口から山口へ向かう(旧)山口線の車窓から見える山の姿は、いつ見てもすばらしいもので、私の楽しみです。」「思い切つて参加して本当によかったと思つています。…六〇も半ばになれば皆様々な経験をしてこられています。それぞれの



文学科第17回卒業生同窓会にて

人生だなーとしみじみ思いました。」「今回は三〇人をめざしたいですね。」「今回は四三年目の方も多く、女性のパワーに圧倒されました。翌日は雪の瑠璃光寺・五重塔に学生時代を重ねね。」「私は初参加でしたが、とても懐しく楽しい同窓会で、行つて本当に良かったと思つています。…皆さん四〇歳年々苦勞しながら濃い人生を送られているという話には感動致しました!!」「念願の再会がかない、深い感動・感激を味わうことができました。…あの日から又新たな一歩が始まった気がいたします。」
「翌日、女性八名は旧女子寮前の龍福寺、大内館跡、池泉庭園、十朋亭等の大殿地区を散策し、…午後から仁保上郷の嘉村磯多生家を訪ねる。」「一次会、楽しく、あつという間に時間が過ぎ、名残惜しかったです。二次会も皆よくしゃべつたよね。」「もつと時間があつてゆっくりお話ししたかつたくらいですね。今から三年後が楽しみな気持ちです。」等々の便りが寄せられた。

(文理第一七回卒・S44・国文学)

楽しいなるこそ
めでたけれ

平川 由野

猛暑が続いた八月お盆過ぎ。山口市湯田温泉で社会学昭和六一年卒業生の同窓会を開きました。平成二二年春、小谷典子先生が定年退職なさつたときの最終講義・懇親会に出席したものが「また会いたいね」と言い、出席できなかったものが「みんなの顔が見たい」と熱望したことをきっかけに、まずこの年九月に博多に集まりました。調子に乗つて昨年春、再び博多で集まりました。東日本大震災の翌日で、テレビや新聞が伝える惨状に圧倒されて沈む気分を「早くから決めていたことだから」と奮い立たせて出かけたことを思い出します。そして「次は山口でね」ということになりました。

さて、私は下手の横好きで大蔵流狂言を習つております。その発表会が八月。「習つてい」と言つて、「狂言、見たことないから見てみたい」と何人かが言つてくれました。しかし、プロの狂言師である我が師も舞台に立つとはいへ、たかが素人の発表会のためにわざわざ山口までお運びいただくのも申し訳ない。ということで発表会をオプションとして、同じ日に同窓会を設定しました。

当日、集合したのは小谷先生ほか八名。九州から三名、益田から一名、地元山口が四名でした。それぞれ皆、仕事をこなし家庭を築き、あるいはシングルライフを満喫し、もちろん順風満帆な話ばかりではありませんが、一生懸命生きてきて中年と呼ばれる世代になった顔が並びました。小谷先生曰く「みんな風格が出てきましたね」。風格…そんなカッコいいもんではないと思いますが(笑)。

卒業して四半世紀「を」を超え、職場ではりっぱな肩書きを持ち、家ではお父さんお母さんであつたりする面々が、学生の頃のままだに「くん」「ちゃん」で呼び合つて違和感がないのは不思議なものです。それぞれにいろいろな人・



社会学昭和61年卒業生同窓会にて

もの・ことと出会い、いろいろな思いをし、学生時代と変わったところもたくさんあるはずですが、ボケとツツコミの力関係も時空を超えてあいかわずで、おおいに盛り上がりました。この気がねのなさが同窓会の魅力なのでしょう。思い出話ばかりでなく、各々が積んできた人生経験をもとに深い話をするのにもよい仲間であることは間違いありません。
今回、残念ながら欠席だった人々もいますので、次回が遠からんことを願います。定観測風写真を保存していけたら楽しいなと考えています。え？次の発表会ですか？…平成二五年八月一〇日でございます。
タイトルは、狂言「靉猿(うづぼざる)」で語られる狂言小歌「猿唄」の一節で、狂言会などの最後に語られるものから引きました。我が同窓会も「楽しいなるこそめでたけれ」と祈念してご報告とさせていただきます。
(人文第五回卒・S61・社会心理学)

留学生奨学金授与生寄稿

見る、聞く、感じる

山口大学での三年間の留学

生活を振り返って

郭 潔

二〇〇九年九月二五日 金曜日 晴れ
 山口市の柳井旅館の二階の部屋に座っている今の私は、頭の中に何も入っておらずぼーとしていた。時刻は夜一〇時一三分だ。テレビの音が耳に入っているけど、何をしゃべっているかわからなかった。そう、もう日本に着いたのか。けさ中国で別れた母の音がまだ耳に残っている、「忘れ物ないよね、パスポートは？こら〜」

なんか泣きたいなあ……これから両親と離れて自分でこの異国で生活することになるのか……なんか夢みたい。

「コンコン」、「郭さん、もう寝たのか？」、旅館の女将さんだ。ドアを開けて、柿みたいな果物が小皿に三個乗っている。「疲れたでしょう。これはうちの樹からみいだ柿だよ。くっくう甘い！食べたらく休んでね〜」と女将さんが笑顔で言った。

なんか、また泣きたくなった。
 ありがとう！明日からどんな生活になるかは分からないけど、この私、必ず頑張ります〜！

二〇一一年三月一四日 月曜日 晴れ時々曇り
 東日本大震災後の三日目。

テレビで震災に関わるニュースが一日中ずっと流れている。避難所の警報はまだ解除していないけど、大きな心配はもう要らない。

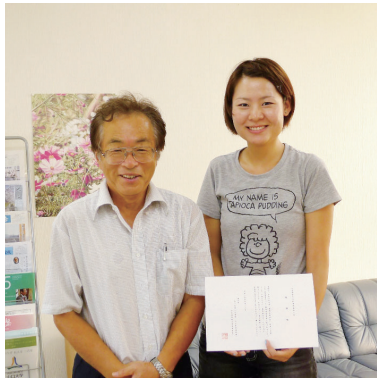
津波に襲われた大地は重傷を負った病人のようになり、静かに寝ている。テレビに映っている恐ろしいシーンはどうしても忘れられない。屋根に船が乗り上げ、車や建物の残骸が積み上げられたままだった。被災地で親友を探す人々の姿がよく見られ、避難の人数も毎日増えているそう

だ。在日留学生たちの不安な気持ちも強くなって、大勢の人が帰国することになった。東京やもう少し離れたところに留学している友人の電話があつて、皆だいたい同じで「帰るのか？」との話だった。

日本はこんなに大震災を受けても、各地方の治安も悪化せず普通通りの生活をしている。物価もほとんど上昇していない。避難所の人々を見てすごく感心したのは、食品が足りなかったのに、皆互いによく理解し、文句も殆ど言わなかったことだ。その瞬間、人々の間の深い繋がりが感じられ、日本は島国なのに世界の経済、文化大国になった理由がやっと分かってきた。心に響いている。

「災害の際、人間はどれだけ弱いものか、どれだけ強いものか」と考えれば考えるほど心が落ち着かない。今私ができるのは、心からお祈りすることだ。「日本は大丈夫、私も一緒に頑張ります。」

二〇一二年三月一日、東日本大震災、私はここにいます。



鴻文会連絡事務所にて
 岡光会長と郭さん

二〇一二年八月一日 土曜日 晴れ

北京時刻一三時二〇分だ。中国の実家で夏休みを過ごしている私。日本の山口から二週間くらい離れて、七月二五日に鴻文会事務所であつた会長の岡光先生のお言葉、「この山口はあなたの日本の故郷だ」を思い出した。山口での日々がまるで昨日のことみたいに目の前に浮かんでいる。二〇〇九年一〇月から留学生活が始まり、人生の一番いい時期ともいえるこの二〇

代には、たくさんの思い出を作った。人文学部の林伸一先生、磯部先生からいろいろと熱心なご指導をいただき、学術上でも人生の面においても貴重なご指摘だと思つている。アルバイト先の先輩たちからの教養も私の仕事観に深い影響を与えている。普段の生活でいつも支えてくれた友人たち、山口の親切な人たちのことも一生忘れない。また、今回鴻文会から奨学金をいただくことができ、この場を借りて再び感謝の意を申し上げたい。

これからも、今まで学んだことや経験などを活かして、社会に貢献できる人間になるために頑張りたいと思う。さらに日中両国の友好関係のかけ橋になれば幸いです。

(人文科学研究科言語文化専攻)

鴻文会「賛助会員」の制度に

ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、新入生の「終身会費(一万円)」により行われています。

鴻文会は、この三〇余年、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理、留学生への奨学金の授与などの活動を行い、最近では「同窓会等」の開催に対して助成を行うなど、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して十分とはいえない状況であります。このような状況の中で毎年卒業生会員や元教員の皆様から多額のご厚志をいただき、諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。

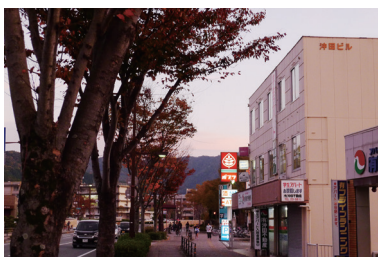
活動を支えて下さった方々のお名前を下段に記して、お札に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員制度について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

加入者名「鴻文会」(郵便振替口座 〇一五〇〇一四一五九〇二)と記した振替用紙を同封しております。それをお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

ご協力ありがとうございました

- 平成二三年度賛助会員(順不同 敬称略)
- 藤井日正、三木允彦、岡野幸夫、深見恭行、田中 伸、野村由美子、川下倫央、中村あけみ、登城孝胤、竹田守恵、田中 晋、江川大器、溝部忠増、東 玉恵、村田英文、宮藤隆夫、中垣八朗、濱崎勢津子、辰巳郁子、要 貴志、奥田和子、大谷泰子、磯部 薫、住吉隆義、細山田康弘、常松尊輝、桑原清繁、福原里奈、青木 寛、沖中武志、北村昇松、古館亜佳里、平田昌司、池 佳代、岡野幸夫、松本英子、山本 力、野村悦子、野村昌弘、鈴木雅之、古森繁樹、小野美典、福田惺子、富田一彦、小西啓子、石川哲也、永久恒夫、松本 馨、須々木由美子、濱村祐子、小池美佐子、橋本 学、向直也、守田愉加理、垣下文雄、尾崎 徹、小牧久壬、西本青而、山本孝夫、本田隆三、濱村浩、椎野由紀子、重村和子、小篠美智子、三輪久恵、梶 真澄、吉村 崇、佐竹利雄、横田由香、真方富美江、田中澄子、中戸義幸、小川朝子、石原憲一、村上勝三、井上真理子、井上基子、井上範子、芳野奈央、光永 昇、島 越郎、宮原省吾、藤原秀晴、磯部貴文、菊谷 進、高橋幸輔、森江裕孝、和田康治、秋村寛之、平田真弓、水畑哲也、大庭直美、卯野建二、高崎淳子、村瀬典弘、伊豫英城、細谷明子、渡邊早苗、野口眞澄、塩治朋江、村上正和、林 久博、南里義則、徳政恒夫、生野龍二、岡 ゆみこ、川邊貴弘、桑木紀雄、岡光一浩



夕暮れの鴻文会事務所

鴻文会会則

(昭和五十六年一月三十一日制定)

(総則)

- 第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学文学部内におく。
- 第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学文学部の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1. 会報及び会員名簿の発行
- 2. 会員相互の連絡、親睦の増進
- 3. その他必要と認められる事項

(会員)

- 1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学研究科修了者
- 2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学研究科院生
- 3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

- 1. 会長 一名
- 2. 副会長 二名
- 3. 委員 若干名
- 4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

- 1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
- 2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。
- 3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

- 1. 事業の報告
- 2. 会計報告
- 3. 役員を選出
- 4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則 この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。

鴻文会役員

平二一・八ノ平二五・八

名誉会長 根ヶ山 徹(人文学部長)

(昭六〇年卒・中国語学・中国文学)

会長

岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

副会長

北川 健(昭三五年卒・国史学)

宮藤 隆夫(昭四二年卒・社会学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)

大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)

大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)

田中 晋(昭四一年卒・英米文学)

添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

赤梨 和則(昭四二年卒・西洋哲学)

兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)

浅川 均(昭六〇年卒・国史学)

山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)

齋藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)

昭六三年院修了

村岡 睦子(平六年卒・社会心理学)

大谷 泰子(平一三年卒・社会情報論)

正分あゆみ(平一六年卒・博物文化論)

平一八年院修了

青島 啓(平一〇年卒・博物文化論)

磯部 佳宏(昭六二年院修了)

岡屋 真理(平一六年卒・日本語文化論)

高田 知恵(平一三年卒・中国語文化論)

中村 匡宏(平九年卒・英米語文化論)

平一一年院修了

池田 容子(平九年卒・英米語文化論)

平一三年院修了

岡村 賢司(平七年卒・ドイツ語学)

ドイツ文学/平一〇年院修了

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学)

フランス文学

中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

監事

村田 博(昭四二年卒・社会学)

渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭(昭四七年卒・ドイツ語学)

ドイツ文学

磯部 佳宏(昭六二年院修了)

村田 裕一(平三年卒・考古学)

村岡 睦子(平六年卒・社会心理学)

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。

要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写一枚を文頭に置き、
 - ④文末に卒業序次・卒業年・専攻を必ず()内表記すること。
- ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、既刊第三一号の「同窓賛歌」の四・五・七・八・一〇・一一頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも八月末日とします。



山口大学キャンパスガイド(キャンパスを歩いてくツアー)を始めました

山口大学では、平成二十四年一〇月から学生スタッフを中心となつて「山口大学キャンパスガイド」キャンパスを歩いてくツアー」を、実施しています。

これは、広く学外の方々に、整備された吉田キャンパスを開放し、地域と大学の垣根を取り払い、より多くの方々に山口大学に親しんでい

鴻文会のホームページ

鴻文会ではホームページを作成して情報発信を行っております。以下に概要をお知らせします。

公開：平成14年。平成19年にリニューアル。

更新：年に数回不定期で更新。

現在のコンテンツ：

1. 鴻文会とは
2. 鴻文会の沿革
3. 会長挨拶
4. 鴻文会役員
5. 新着情報
 - 鴻文会関連
 - 人文学部関連
 - 各研究室同窓会など
6. 写真コーナー
7. 会報
 - 「鴻文」PDFダウンロードページ
8. 保管庫
 - 鴻文会関連の規則など



毎年少しずつですがコンテンツを充実させております。今年度からは、会報「鴻文」の全てのバックナンバーを、PDFでダウンロードできるようになりました。会員のみなさんから情報をいただいたり、あるいはご要望にお応えしたりといった形でも、拡充して行ければと存じます。是非とも一度ご覧いただいて、ご意見やアイデアをお寄せください。何卒ご協力のほどお願い申し上げます。「同窓会等」の助成要綱や申請書等は、鴻文会ホームページからダウンロードできます。URL: <http://homepage3.nifty.com/koubun/>

(鴻文会ホームページ担当)

ただく機会を設けるための取り組みです。キャンパス内のいろいろなスポットを学生が案内することによって地域間交流、世代間交流の一端を担うことを目的としています。きれいに整備されたキャンパス内を若い学生達と一緒に「てくてく歩きながら」散策しませんか。どうぞお気軽に足をお運びください。

■ツアー実施日及びガイド時間
毎月第一、第三金曜日(年末年始・お盆・祝

日を除く)の一五時から約二時間程度ご案内します。(天候や時期により時間を短縮することもあります。)

■ツアーへの参加は無料です。小学生から高齢者の方までどなたでも参加できます。また、同窓会の皆さまが山口市内で会合などをされる際にもご活用ください。

■集合場所
吉田キャンパス(山口市)正門付近に、一四時五〇分までにお集まりください。
学生スタッフがお待ちしております。

■ツアーの内容
大学の屋外施設を中心に、歩きながらご案内します。研究室や講義室等建物内のご案内は原則としてできませんのでご了承ください。

■申し込み方法
事前申し込みは不要です。ツアー実施日に指定された場所へお越しただければ結構です。ただし、一〇名以上の団体の場合は、案内希望日の二週間前までに担当へご連絡ください。

■問合せ先(担当)
山口大学 地域連携室
TEL (083) 933-5797
FAX (083) 933-5029



第1回キャンパスを歩いてくツアーにて

編集後記

本号で現メンバーによる会報の編集は一応の区切りとなります。四回の会報、ご愛読有難うございました。来年八月の総会には、多くの方々にお会いできますことを楽しみにしております。(岡光一浩)

重中さん(本誌一〇頁)とお話していると、周囲の気持ち明るくなるようなヒト言が必ず入ります。人生を通して、そうした心の灯りを掲げてこられてのことなのでしょう。(北川 健)

同窓会が厳存する限りは、同窓会そのものの存在感を様々な機会ですすことが求められる。来年は四年に一度の総会が開かれる。全国の同窓会員の皆様、おいでませ。鴻文会総会へ。(宮藤隆夫)

今秋は、「ちよるる」が来たり、大学のキャラクターが誕生したり、ゆるキャラが大学構内を癒してくれました。この会報で、皆さんもほっと一息していただければ。(渡邊早苗)

今年、編集集中の不測事態が多々生じました。そんな中、様々な方々に助けられ、発行が実現したことを喜び感謝するとともに、益々この縁が実り多きものとなるよう願っております。(村岡睦子)

漢検の結果を待っています。私にとって漢検は人生の転機です。今年も「鴻文」にかかわらず、何となく始めた漢字の勉強が思いもかけぬ世界への扉であったと驚いています。(大谷泰子)

先頃、大学のキャラクター「ヤマミイ」が誕生したとのこと、思わず笑みがこぼれました。プロフィールを拝見する限り、なかなか魅力的な猫さんのようです。今後の活躍が楽しみです。(池田容子)